

# 桜切手のニセモノの見わけ方(上)

市田左右一著 〈The Cherry Blossom Issue of Japan〉の紹介とともに

小柴 谷 吉

本誌8月号の〈切手の窓〉で、米国の切手誌に「桜切手の模造品」の記事がでたこと、日本ではこういう分野の発表が遅れていることをお知らせしたところ、多くの会員の皆さんから、同誌の記事の転載をするようにと要望されました。専門の方の意見によりますと米国誌の記事は不完全で、むしろ日本人がじぶんたちの目で見たものを発表すべきであるとされ、本誌はここに新刊書の紹介をかねた〈ニセ切手発見法〉を、ご要望にこたえ発表することにしました。

## はじめに

日本切手は発行いらい、まもなく100年をむかえようとしています。切手の収集はこの10年らい、きわめて盛んになり、広範な人びとに楽しまれるようになってきました。これはたいへんよいことですが、収集界ぜんたいの水準は、欧米の先進諸国にくらべ、40年は遅れているといわれます。

レベルが上らない原因の1つとして考えられるのは、出版物の貧困さではないかと思えます。たとえばすぐ思い出すことのできる、1960年代においてみても、日本切手に関する総合的なハンド・ブックは1冊として出版されていません。わずかに日本郵趣協会から刊行されている〈新日本切手カタログ〉が、その代用品の役をはたしているという、お寒い有様です。

いまから38年前の、1928年に英国人ウッドワードが、シャンハイにおいて出版した〈大日本帝国及び同属領の郵便切手〉が、いままでに刊行された、ただ1冊の日本切手の総合的な研究書です。それから40年もたとうというのに、いまだその規模を上まわる本は、1つとして作られてきませんでした。

日本の郵趣界の進歩は、けっして止まっているわけではありません。ウッドワードいらい、数多くの新しい発見や、研究もされていますが、それを広

く多くの人たちに知らせる努力に欠けていたといえましょう。

## 有意義な出版

そういうなかにあつて、最近、市田左右一氏によって“*The Cherry Blossom Issue of Japan, 1872-1876*”が刊行されたことは、ひじょうに有意義なまた画期的なことといえます。

この本は、明治初年の日本の郵便創業当時に発行された、手彫切手とよばれる凹版印刷の一連の切手のうち、1872年から76年にわたって発行された、いわゆる“桜切手”(新日本切手カタログ#9~39)の全ぼうを、研究者の立場から専門的に書いた、しかもユニークなものです。著者は1961年にすでに“*The Dragon Stamps of Japan, 1871-*

72”を出しており、この2冊でわが国の〈手彫切手〉についてのまとめを完成されたわけです。

日本人の手によって、はじめてなしたげた大きな金字塔として、心からなる敬意をささげるものですが、ただ残念なことに、主体は英文で書かれ、本の価格がひじょうにはることで、本の大きさB5版(本誌と同じ)、総アート335頁、原色図版5頁、重量1.3kg、写真版と図版はひじょうにたくさん入り豪華なものです、定価は9000円です。伝えられるところによりますと、その出版部数は1000部だそうで、部数から考えますと、この値段は一般的とはいいかねます。

日本人の英語を読めない人のために和訳した本が(81頁)同じ大きさでそえられています。したがって本文を見ながら、和訳の方をみれば、著者の考えはだいたい理解することができるでしょう。

## 専門家なら求めたい

内容について紹介し、それを論評するよといものが、編集部の希望でしたが、書評というものは2つの意味



第1図 「模造」「参考」(いずれも右書き)などの文字の入っている代表例(2倍大)



第3図 ニセ消印のいろいろな例

をもって、その目的だけをすませるのでしたら、くわしく書くことを必要としませんから、結論だけを先きに2つの項目で書いておきます。

①買うべきかどうか——書評の大きなねらいは、買いなさい、よしなさいの目安をしめします。わたくしの観点をいいますと、手彫切手を本格的に研究したいという人には、ぜひすすめたいと思います。ちょっと高い切手の1枚分で手に入れることができるのですから。この本は実用書ですから、読まないで飾っておくことが目的でしたら止めた方がよいでしょう。書棚をかざるためには、もっと金額が低くて、量のある本がたくさんあります。

②内容はどうか——買わない人にとっても、当然関心のあることですし、著書への批評として、重要な役割をもつ項目です。これについては、この本を“研究成果の発表”として考えるか、広く多くの人たちに手彫切手の広範な知識を教えようとするのかによって、ちがってきます。著者はその前書で「この本に見られる研究は——今日までに判明していた事柄や、筆者の研究した結果を整理して、将来の桜切手研究の組織的な基盤を提供した」とされ、本文にあっては個々の切手を、解説的に書き、ウッドワードいらいの成果を基礎に、著者の研究成果を加えるという手法をとっています。

したがって〈研究論文〉的なものよりは、実に詳細な手引き書としての役割りを果そうとしています。しかし内容と表現は決して平易ではなく、相当な予備的、基礎的知識がないと読みこなせず、手引きとするのは困難です。本

の価格からいっても、これを手に入れることのできる人は、ごく一部の限られた数になってしまうでしょう。

これだけ立派な本を作られた、努力に敬服し、またこの本から多くの知識をえる利用者の1人として、感謝の意をささげるものですが、広く普及しにくいということを惜しみます。

#### 〈偽物鑑定〉の部分を紹介

わたくしは、かねてから手彫切手の偽造品について、だれにでも分り、初歩時代の失敗を防ぐための、実用的な文章を書くことを予定していました。そしてほぼ稿をまとめたところで、編集部から〈桜切手〉の紹介記事を命じられましたので、わたくしのつたない記事をのせるより、市田氏の著作のうちから、偽造切手に関する記述を紹介し、広く力作の内容の一部を伝えることによつて、編集部からおおせつかった役目をはたしたいと思います。

なお、市田氏は相当に知識をもつ人を前提として書いておられますので、専門的な用語や、専門的に記されているところがあります。しかしわたくしは同書の内容の紹介を通じ、初歩の人たちに、いますぐ知っておく必要なことがらだけを、分りやすく紹介するようにしました。この点著者と、読者の皆さんに、あらかじめお許しいただきたいと思います。

#### 第1級の収集にもニセモノが

同書では第5章に“Counterfeiting and Forging”(偽物及び変造品)という概説を入れてあります(和文3頁)。ここでは全体に通じる問題を取りあげ個々の切手については、それぞれの項

で説明する方法をとっています。

以下引用は、著作に添えられている和訳をそのまま用いることにします。

著者は「偽物の大部分は、少しい基礎的な知識と経験で、容易に判別し得る程度のちやちなもので」あるが「偽物や変造品の混っていない蒐集は極く少ないし、第1級の蒐集の中にも怪しいものが時々発見される」と警告をしています。

わたくしの狭い範囲の経験でも、外国人の日本切手コレクションに、偽物がなかったということは、ほとんどなかったという位、日本切手の偽造は広く行きわたっています。

著者は偽物の種類を、①「大部分は日本を訪れた旅行者の土産物として「作られたもの」、②「特別に巧妙な少数の偽物」、③「幼稚な欧州製の偽物」、④「偽作品、変造品及再製品」に分けています。この番号はわたくしが便宜的につけたもので、著述はけっして系統的ではなく、文の途中に「最後に、偽物鑑定には、真物の切手を繰返し注意深く観察することが最も重要だといひ度い」というような、一般的ないい方で、しかも初歩者にとって不可能なアドバイスが、「最後に」という言葉で出てきて、面くらわせます。

#### まず覚えておきたいこと

①は「郵趣家が見れば簡単に見破ることができる。ほとんどの偽物は次の条件で区別できる」として、主要なポイントをしめしています。

(1) 切手の図案の中に、参考、模造又は見本の2つの文字が同色で加えられている。但し、この添加文字は

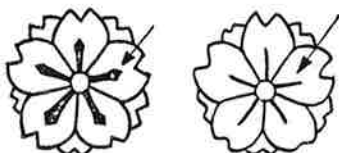
しばしばけずり取られたり、偽消印でかくされている。

(2) 多くの偽物は凸版印刷である。桜切手は皆凹版である。

(3) 多くの偽物は(英文は Some forgeries)ある部分に真物と全く異った図案をもっている。

残りの1割程度の偽物は、偽消印、紙質、目打並に色調等を真物と較べるか、それ等の簡単な知識があれば大体除去できる」

(1)について拡大図を入れていますが部分図のため、初歩の方には分りにくいと思いますので、ここでは実物から2倍に拡大した部分図をかかげておきます(第1図、10ページ)。



第2図 切手四隅の桜の模様

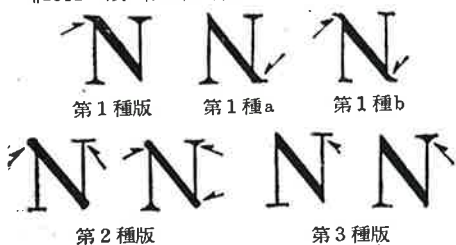
(3)のところでも示している図は同書からそのまま写しておきます(第2図)。この図は切手の四隅にあるもので、「参考」「模造」「見本」などの文字のあるものも多く見られます。

偽消印については同書と〈新日本切手カタログ〉1967年版から、図を引用してかかげておきます(第3図、11ページ)。なお〈新日本切手カタログ〉1967年144頁に、偽消印についての解説がありますので、消印についてはここではふれません。

### 特別巧妙なニセモノは珍品

②の特別に巧妙な少数な偽物として著者はつぎの14点の切手を上げ「これ等は恐らく明治時代に日本で造られたようである」と考え、見わけ方を個々の切手のところで説明しています。

- #10 1銭 青 和紙
- #13A 4銭 暗い紅 洋紙



第4図 額面SENの“N”のセリフのタイプ

- #14 10銭 青味緑 和紙
- #15 20銭 紫 ”
- #16 30銭 灰黒 ”
- #21b 6銭 黒味紫茶(子) 洋紙
- #24 30銭 灰黒(イ) 洋紙
- #30 4銭 青緑(イ) ”
- #31 6銭 茶だいたい(ヌ) 洋紙
- ” ” (ツ) ”
- ” ” (子) ”
- #34 30銭 紫(ロ) 洋紙
- #36 4銭 こい緑 ”
- #37 1銭 うすい茶 ”

「これらはほとんど稀少品で、研究資料として価値がある」とされていますし、初歩者には手に入れる機会は少ないでしょうし、専門的になるので、ここでは省略します。

### 凸版や石版で印刷のもの

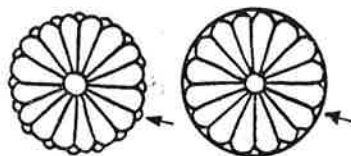
③の欧州製は「総てが凸版印刷」ですぐ見分けられるとされていますが、筆者の経験では、石版印刷のものもよく見うけられます。総じて版面のサイズがちがっていたり、またひどいものは「模造」「見本」などの文字の入ったものを、更にそのまま複製した粗末なものもあります。

④については、専門的ですし、それらは取引きのとき金額がかさんだり、あらかじめ専門的に調べなければ入手するものではありませんから、この解説では省略します。なお「政府の再製品」については、〈新日本切手カタログ〉1967年版の〈手彫切手〉のはしがきに説明されています。

概説の引用と説明がだいぶ長くなってしまいましたが、それでは個々の切手に入りましょう。なお、本稿で記している、すべての切手番号は〈新日本切手カタログ〉の番号です。本誌にのっている日本切手に関する記事の番号は、みな〈新日本切手カタログ〉のものですが、念のため書きそえます。



第6図 半銭の部分拡大



第5図 菊の紋章の輪かくの相違

### #9 半銭 こい茶(和紙)

同書ではつぎのように書いています。(以下いずれも「」に入れ、すぐ書き出しているときも同じ引用です)。

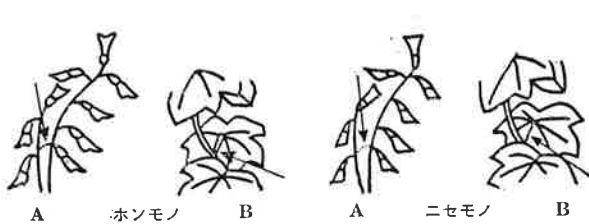
「1. キ半銭を含む、すべての偽物のNは第1種型であり、又、図に示すように菊紋章ならびに桐枝が異った図案となっている」

ニセモノ探しは、この引用で十分です。N字の第1～3種版の区別(第4図)と、菊の紋章のちがいの図(第5図)をそれぞれ同書から引用してかかげます。なお「模造」など文字の入った切手は、この菊の紋章をみる前に探せませんが、「見本」という文字が消印でかくされているものがあります。その切手は菊の紋章は本物に依っていますが、「半銭」の半の上の部分がちがいます(第6図右のもの)。

キ半銭の本物とニセモノをならべておきます(第7図)。額面の下の1/2の1の第1画のセリフ(活字字体のヒゲかざり)が本物にはなく、ニセモノにはついています。ご覧のように半銭の上の2画を彫り忘れ、「半」の字が「キ」のようにみえるところから、収集家は「キ半銭」とよんで、手彫切手のなかで、いちばんポピュラーなエラーとされています。(〈新日本切手カタログ〉13頁参照)



第7図 “キ”半銭の特徴(矢印のところ)



第8図 切手図案左の「桐」の枝と葉の部分の拡大図

### #10 1銭 青 (和紙)

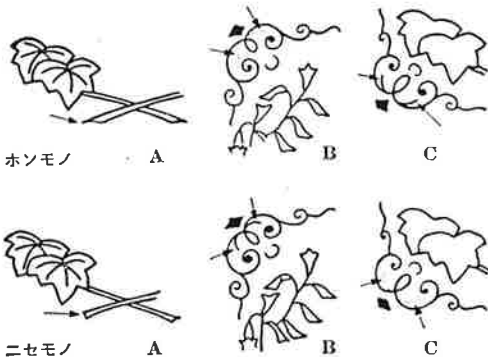
ニセモノとして、まず「参考」や「模造」の文字の入ったものを除きます。この切手にも「模造」(右書き)の文字をみえないように消印(もちろん偽物)しているものがあります。

同書では、

「(1)濃藍色のもの、(2)N文字が第3種以外のもの、(3)縞紙」のものは、本物と考えてよいとしています。いいかえればN文字が第3種版であったら、まずうたぐってみる事です。わたくしの手許にあるニセモノも、すべて第3種版の特徴をもっています。そして、「残りの偽物は、図に示す異った図案を持っている」として、第8図にしめす図をかかげています。実際にニセモノにあたる時、消印でかくされていたり、この図の通りというもののばかりではありませんから、初歩者のためには、もう少しはっきり示せる方法を考えたいと思います。例えば第8図の特徴があっても、他の版なら本物ということがあるからです。

### #11 2銭 くすみ桃赤 (和紙)

「1. 8割程の偽物(英文 all forgeries)は図に示す図案の相異で区別できる  
2. 総ての偽物は第3種Nである」として、第5図に示した菊の紋章の



第10図 印面下辺の交差した枝の先端と左側上下角の拡大図 印には——

ちがいと、かざり模様のちがいをしめしています(第9図)。たしかにその通りですが、たぐみなニセモノにはほとんど本物と同じようなものがあり、むしろN字の方で見た方が早いでしょう。ニセモノはすべて第3種N(第4図参照)ばかりで精巧なニセモノにも、本物のN字(第1種の型)はありません。もし第1種であるときは「見本」または「模造」の文字がかくされていて、ルーペでよくみれば、必ず探し出すことができます。

### #12 2銭 黄 (和紙)

「1. 1割程の偽物は、模造文字入りである。2. ほとんど偽物は図(前記の第9図と同じ)で判定できる。3. 縞紙なら真物と見てよい」として、英文で「ほとんどの偽物は2銭赤和紙の偽物原版で刷られている」とされています。」

初歩者のためにもう少し補足しますと、用紙はほとんどが薄手の洋紙で、数多くみられるニセモノを早く見破るには、つぎのようなポイントをさがすと早いでしょう。この見方は、同じ原版が使われている、#11にもほとんど共通しています。

1. 菊の紋章が第5図のようなもの(それらはぜんぶニセモノです)

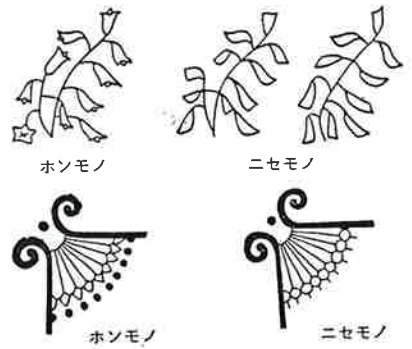
2. 本物は日本紙へ黄の印刷なのでとても見にくいものが多い。それに反しニセモノは図案がみやすい。

3. したがってつぎに第9図の特徴をみつけることができます。

4. 未使用はなく、消

a. 外側リングの太さ3mmもある二重丸型にせたもの

b. ○のなかに消の字のあるもの



第9図 「桐」と切手印面左角の拡大図

c. 記番号で「一四号」(左読み)とみえるもの  
d. <書店>というレイ書体の字がみえるもの  
などがみなニセモノです。

### #13 13A 4銭 暗い紅 (和,洋紙)

同書でまず4銭和紙(#13)のニセモノの見方のところを引用しますと、

「1. 第1種版切手は真物  
2. 偽物は皆無地であり  
3. 9割までの偽物は図に示す特徴をもち(その図を第10図へ引用)  
4. 上記の特徴のない1割の偽物は不規則な隅の桜花、紙質または偽消印などで容易に区別できる」

とのべられています。残念ながらこの引用のままでは、初歩者には区別が困難です。なぜなら同じ版を使い洋紙の切手(#30A)にせた、ニセモノがたくさんあり、初歩者にとっては、和紙のニセモノか、洋紙のニセモノかの区別もはじめはできないからです。

そこで、引続き洋紙の分について、以下に引用します。上の引用と合わせてお読みになって下さい。

「1. すべての偽物は第2種型である(引用者注・前記の引用と同じ意味を反対の表現になっています)

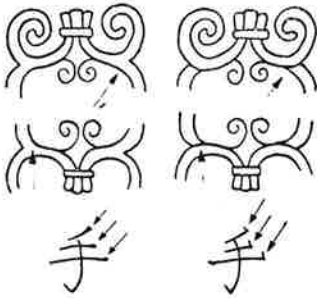
2. 偽物の約4分の1は模造の文字が入っている。

3. 残りの偽物はつぎの図で区別できる。(その図は第10図に引用したものと同一図



第11図 「N」字の相違

のほか、N字の型だけがふえていただけですから、そのN字型を第11図へ引用します)



第1種版

第2種版

第12図 4銭両側柱様線の線と“手”

以上の引用から、ニセモノにあたってみましょう。第1種版と2種版の区別は、〈新日本切手カタログ〉にも図がでていますが、ここでは同書から引用しておきます(第12図)。

**和紙**—黄味がかった、きわめて薄い、堅い用紙を使って、和紙の切手のようにみせかけています。引用のようにニセモノは2種版にしかありません。つぎにみるところは、第10図のポイントですが、わたくしのもっている和紙にせた第2種版のニセモノは、すべて第10図のAの部分は本物とそっくりで、Aのニセの型をしていません。したがってつぎの区別は、Bのところで見ます。この図は菊の紋章の左方の角にあるかざりで、矢印でしめすように線のところの線が欠けているのがニセモノということになっています。しかし数多いニセモノのなかには、ここがAのようにになっているものもあり、まどわされます。しかし幸いにもそのようなニセモノは左下の角のかざりが、第10図Cのようにになっているので、探し出すことが可能です。

なお、和紙をまねたニセモノの色調

は赤味だいで、つぎのべる洋紙ニセモノとくらべて、黄味がつよくなっています。赤味だいで、用紙がやや厚いニセモノがあります。それは石版印刷で、「郵便切手」の文字がひどく崩れていて、すぐ分ります。

**洋紙**—ニセモノは第1種版にも第2種版にも、同じようにあります。著者はたぶん感ちがいされて書かれたのだと思います。第11図に引用しましたN字のセリフのあるもの(すなわちニセモノ)は、第1種版をまねたニセモノにだけ入っている特徴ですから、その点からもはっきりしています。

つぎに第1種版をまねたニセモノの特徴は、第10図Aの矢印の切り口が、切手印面の縦の方向にほとんど垂直になっていることでも区別できます。

第1種版をまねて、上にあげた特徴をもっていない切手で、印面の線全体が太くつぶれているのも、ニセモノです。これは凸版で印刷され、印面寸法がよこ19.5<sup>ミ</sup>、たて22<sup>ミ</sup>(本物は19.2<sup>ミ</sup>×22.2<sup>ミ</sup>平均)です。

第2種版をまねたニセモノは、すべて第10図Bの特徴をもっていますからすぐ判別できます。第2種版のタイプには「模造」の文字が〈切手〉の文字をはさんで入ったものがあります。

### #36 4銭 こい緑(洋紙)

本物の切手が、原版はほぼ同じで、刷色だけかえて発行されていますと、ニセモノも同じことをします。1875年2月4日に発行された、改色4銭緑(洋紙カナなし、#36)切手は、#13の原版を使って印刷されたものですから、ニセモノの多くも、同じことをしていま

す。したがって順序はちがいますがこの項でとりあげ、系統的にニセモノが分るようにしたいと思います。

同書では、つぎのように説明しています。

「(1) 第1種型の偽物

a 約半分が図Aの特徴(引用註第10図Aのものと同じ)

b 他は雑な印刷で、図案が皆いびつである

(2) 第2種型の偽物

a 可成り多くが模造文字入り

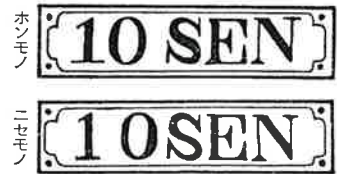
b 残りは図Bの特徴(引用註・第10図Bのもの、その項で説明したCのものが入っている)

ここではじめて、4銭のニセモノに第1種型、第2種型の両方をマネたものがあることを指摘されています。ニセモノの具体的な見分け方は、#13および13Aのところの説明と同じで、刷色が暗い緑にかわっただけです。

### #14 10銭 青味緑(和紙)

「1. すべての偽物は、“0”の位置が図のようで、真物と異っている」

そしてニセモノの刷色は「皆青緑か灰青色である」と説明されています。“0”の位置は第13図のようで、本物は“0”が“1”の方により、ニセモノは反対に“S”の方へ寄っています。これがいちばん分りやすいポイントですが、



第13図 “0”の位置の寄りぐあい

図案下方に片カナが入ったもの（〈新日本切手カタログ〉1967年版13ページの拡大図参照）のときは、“0”が“S”の方へ寄っているのがふつうですからカナの部分もよく注意して下さい。

### #15 20銭 紫（和紙）

1. ほとんどの偽物には参考及模造の文字が入っているから容易に識別できる
2. 凸版印刷のちゃちな偽物があるが、これもすぐわかる
3. 薄紙に印刷された危険な偽物が存在する。これはねぼけた赤味のあるライラック色である。このような切手を買う時は、専門家の意見をきくべきである

第1項を補足しますと、「参考」の文字は図案中央〈郵便切手〉の文字をつめ、その下につづいて入っています。「模造」は桐の紋の下方左右へ分けて右書きで小さく、あるいは小さく淡い字で入っています。「参考」と「模造」の両方が入ったものはなく、この両方のニセモノがほとんどで、凸版のちゃちなものというのは〈郵便切手〉の文字が曲っているのも分りますし、ほかに印面と目打の間（ガッター）が2〜4ミと大きいのもニセモノです。

第3項の注意は、初歩向きに具体的に説明するのは困難で、著者のいうように専門家に相談すべきでしょう。

### #16, 16A 30銭灰黒（和紙、洋紙）

この切手は原版は同じで、用紙だけが違うので、ニセモノも版の見わけ方は両方に共通しています。まず同書から引用しましょう。和紙では、



ホンモノ



ニセモノ

#### 第14図 30銭切手の中央の文字

1. 偽物は皆4隅の桜花の構図が真物と全く異っている（第2図参照）
  2. 約3割の偽物には、参考文字が入っている
- と書かれ、つづいで洋紙では
1. 次の図ですべての偽物は区別できる（註・次の図とは第2図）
  2. 中には参考文字の入った偽物もある
  3. すべての偽造品は中央の漢字の筆蹟が不適当なので発見できる（註・この項は和文に訳なし）

と説明されています。いい方に少しがいはありますが、本質は同じで、図案四隅の桜の花のなかの線の太さで区別することが書かれていますが、これだけでは初歩者に不十分です。本物そっくりの形もあります。

それより確かなのは、第3項に書かれている〈郵便切手〉の文字を、よくみることです。第14図にその拡大図を入れました。このような美しいタッチ、特に〈手〉の字の筆格は、ニセモノにぜったいありません。

なお「参考」入りは、菊の紋の下方左右、〈郵〉の字をはさみ、ごく小さく入っているものと、〈郵便切手〉の四字の下に入ったものがあり、後者は

ひと目で、前者はルーペで注意して見れば発見できます。

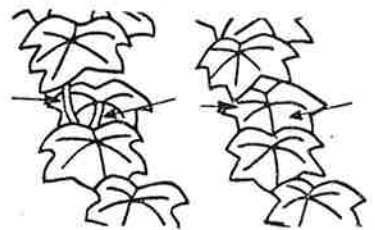
用紙はみな洋紙で、ごく薄い日本紙ににせたものから、ごく厚手の洋紙まで、いろいろありますが、キメ手に考える必要はありません。

### #17 半銭 茶（洋紙、カナ(i)(ロ)

1. ほとんどの偽物は、図に示す様な異った構図によって見付けられる（図を第15図に引用します）。
  2. 凸版印刷のもの、あるいは仮名ハはもちろん偽物である
- 上記の引用で、ニセモノを探すのはほとんどだれにでもできるでしょう。例外のものとして、第15図のニセの特徴をもたず、本物に近い図のものがありますが、それは用紙の表に茶を印刷しているので、裏返しにすると紙が白いので、すぐ分ります。このニセモノのカナは(i)で、カナの入るマスに対し字が小さいのも特徴です。

### #18 1銭 青（洋紙、カナ(i)〜(ロ)

同書の和文には「すべての偽物は図のような異った図案をしている」として、第10図Aは引用したと同じ図を示しています。



ホンモノ

ニセモノ

第15図 2銭「桐」の葉の拡大図

英文の方をみますと「ただしカナ(イ)を除く。すべて凸版印刷は偽物である」と入っていて、和訳ではこの部分が省略されています。わたくしの経験では初歩者のために、つぎのように補足しなければならぬと思います。

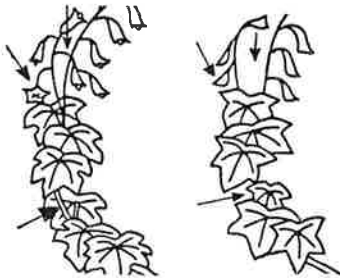
1. カナ(イ)はすべて「模造」の文字がカナの上に小さく入っています
2. カナ(ウ)と(子)はそれ自体がニセモノです
3. カナ(イ)と(ハ)のニセモノだけが第10図で区別できます
4. カナ(イ)にあるニセモノは第10図の区別では判断できず、用紙が白く多穴質のものはニセモノです。

### #19 2銭 だいたい黄

(和紙(イ)(ウ), 洋紙カナ(イ)~(ム)まで)

この切手は和紙と洋紙があり、本物の原版は少しちがいますが、カナ(イ)と(ウ), すなわち和紙の方のカナ入りしか作っていないようです。わたくしの調べた範囲では、その他のカナはまだ発見されていません。

まず和紙について引用しますと、「すべての仮名イ及タの偽物は図に示す様な異った図案なのですぐ判定で



ホンモノ

ニセモノ

第16図 4銭「桐」の葉の拡大図

きる(図を第16図へ引用します)」

- そして、洋紙についてみますと、
1. ほとんど大部分の偽物は図に示すような異った図案によって区別できる(図は第16図の部分図)
  2. 凸版印刷のものは偽物である」と書かれています。これで、カナ(イ)と(ウ)にニセモノがあることははっきりしますが、その他のカナにはあるのかどうか、判断に苦しみます。

わたくしの補足をしますと、

1. カナ(イ)と(ウ)以外のカナには、まずニセモノはないと考えられます。理由はニセモノを作った当時、2銭洋

紙カナ入りの使用済は、本物がいくらでもたやすく手に入り、わざわざ異なるカナ入りを作らなくても、和紙のカナ(イ)と(ウ)のために作ったニセの版を流用して、洋紙の切手を作ればよかつたのではないのでしょうか。

2. ニセモノ消印は、ほとんど第3図のニセ消印のうちの、どれかが押されています。前にも上げた外側リングの太さ3mmの二重丸型のニセ消印も登場します。
3. したがって、(イ)と(ウ)について、第16図で注意すれば、ニセモノはほとんど選び出すことができます。

### #20 4銭 暗い紅(洋紙, (イ))

### #30 4銭 青緑(洋紙, (イ)(ウ)(イ))

この切手はほとんど同じ図案で、刷色をはじめに暗い紅(#20)から、あとで青緑(#30)とかわって、カナの種類がふえただけです。ニセモノの方もだいたい同じ方法をとっています。したがって両方をみてみます。まず#20切手について、同書の英文から要点を引用します。

1. すべてのニセ切手は“N”字の第3種版か、枠の型が第2種版である(第4図と「新日本切手カタログ」#13の拡大図を参照)。
  2. 菊と桐の枝が交り、カナの入った部分の先き、菊の枝のはしの切り口が直角である(第17図参照)。
  3. カナ(ウ)はニセモノである。多くのニセモノには「参考」や「模造」の文字が図案のなかに入っている。
  4. ひじょうに精巧なものがある。
- 緑色の切手(#30)については、
- (1) ほとんどの偽物は仮名イであり仮名ロ及ハの切手は真物と考えて



ホンモノ

ニセモノ

第17図 カナ文字入り部分の拡大図

よい。

- (2) 仮名イの偽物には参考文字入りがある。
- (3) 枠が第2種型か、Nが第3種型のもののは偽物である(上記の1.の引用と同じ図を参照下さい)
- (4) 残りの偶物は図にある特色で見出せる(この図は第17図と、第10図のB, Cとほぼ同じものです)
- (5) 稀にある仮名ロ及ハの偽物は、堅いポーラス紙なのでわかる。
- (6) 凸版印刷のものは偽物である」初歩者のために、もう少し簡単に整理し、補足しましょう。

1. 枠の型が第1種版のニセモノが紅色にも、緑色にもあります。しかしそれらは、いずれもカナの部分の、枝の先端(第17図)をよくみれば、太くなっていたり、不均正だったりするのでニセモノとわかります。
2. カナ(ウ)にあるニセモノは、印面の線が全体に太っています。
3. カナ(イ)のニセモノは、わたくしの調査では、まだ発見していません。
4. 凹版で彫られ、いろいろなポイントで本物とそっくりのニセモノがあります。カナは(イ)で、これは“SEN”の文字がやや細いのと、用紙が堅目でやややすく、目打11½で、大型白抜十字ボタのような消印がされている特徴をもっています。(未完)